

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

1. 研究課題

東アジアの宗教美術と社会

Religious Art and Society in East Asia

2. 研究代表者氏名

稲本 泰生

INAMOTO, Yasuo

3. 研究期間

2022年4月-2025年3月(2年目)

4. 研究目的

本研究では中国の仏教美術を中心に、東アジアにおける宗教美術と社会の関係性について実作例に即した考察を行う。

当研究所には水野清一・長廣敏雄らの中国石窟研究に代表される、仏教美術研究の膨大な蓄積がある。2017～2021年度に組織した『龍門北朝窟の造像と造像記』班ではこの伝統を継承しつつ、今日の国内外における研究水準にみあった基盤の整備に貢献することに重点をおいた。具体的には、所内で新たに確認された龍門石窟の拓本資料群を活用して、造像記の文面・内容を彫刻の造形と照合しつつ確認する作業を行い、北朝期の事例の過半について検討を終えた。

その結果改めて浮き彫りとなったのは、造像の様式・図像・制作過程などを理解する前提として、担い手となった個人・集団の属性や構造、すなわち身分の貴賤、出家在家の区別、性別、血縁関係、出身地などを把握することの重要性である。文字情報が豊富な中国の造像は、こうした観点から宗教美術のあり方を研究する際に、とりわけ有効なモデルを提供する。

本研究では引き続き、北朝隋唐期の龍門造像記を中心とする、中国仏教美術関連の文字史料の検討を一つの柱とする。一方で「社会との関係」を共通テーマとしつつ、対象を東アジアの宗教美術全般にも視野を広げて班員による研究発表を行い、多様な事例から議論を深化させる。両者の総合によって学界の共有財産となる基礎資料を蓄積するとともに、文物研究の場に広く応用可能な新たな視点の獲得と、厚みある成果の創出をめざす。

This study focuses mainly on Chinese Buddhist art, and considers the relationship between religious art and society in East Asia based on actual examples.

Our institute had produced an impressive amount of scholarship on Buddhist art, the most exemplary of which being the works on Chinese grottoes by Mizuno Seiichi and Nagahiro

Toshio. Continuing the tradition of these forerunners, the seminar group “Buddhist sculptures and their inscriptions in the Longmen Caves of the Northern Dynasties” was organized from 2017 to 2021 with the aim of contributing to the development of a research foundation that meets the international research standards of today. Specifically, by utilizing the newly confirmed rubbing materials of the Longmen Grottoes from the institute, members from the seminar group checked the content of the inscriptions, and evaluated them in light of their accompanying sculptures. Over half of the extant cases from the Northern Dynasties had been thoroughly discussed and checked in this manner.

A few heretofore understudied factors came to light as a result of our study. Proceeding from a study of such art historical questions as style, iconography and the construction process of sculptures, it is further necessary to understand the role of societal factors such as the social level of the patron, their status as laymen or monks, gender, kinship and origin in the shaping of religious expressions. Chinese Buddhist sculptures provides rich textual information, and our study with such a societal perspective provides a particularly effective model for the study of religious art.

This current study continues to focus on inscriptions from the Longmen Caves of the Northern Dynasties to the Tang period and the textual information for the study of Chinese Buddhist art. Meanwhile, with “relationship with the society” as a common theme, the group members will present their research to broaden members’ horizons on religious art in East Asia in general as well as to deepen discussions by introducing various examples. By integrating the two aspects, we aim to accumulate basic materials that will be a common property of academia, to acquire new perspectives that can be widely applied in the study of cultural relics, and to generate fruitful research results.

5. 本年度の研究実施状況

二年目の2023年度も対面・オンラインのハイブリッドで研究会を開催し、メンバーの参加形態は各回ともほぼ半々であった。当班では研究所の蔵する拓本資料を活用した龍門石窟造像記の読解を継続的に行っている。2023年度は初唐期に主要造像が完成した賓陽南洞を取り上げ、最重要史料である「伊闕仏龕之碑」の精読を行ったほか、洞内東壁については無紀年・無銘分も含めた全ての造像に網羅的な検討を加えた。またかつて龍門研究院に在籍し、同洞について包括的な研究を行ってきた李瀾氏による二度の研究報告を実施し、最先端の知見を共有することができた。龍門研究に加えてメンバー各人の専門分野に沿った研究報告にも力を入れ、中央アジアから東アジアに及ぶ、仏教関連の遺構と遺物を扱った多彩な発表が行われた。このほか川瀬由照氏をゲストスピーカーとして招き、東アジアの僧形像に関する新説に接する機会を得た。

6. 本年度の研究実施内容

- 2023-04-11 「伊闕仏龕之碑」会誌 発表者 稲本泰生 人文科学研究所
- 2023-04-12 「伊闕仏龕之碑」会誌 発表者 稲本泰生
- 2023-05-23 研究報告：唐代龍門石窟における女性仏教徒とその実践 発表者 李瀾 マクマスター大学
- 2023-06-13 研究報告：敦煌藏経洞出土文書 S.2897 V、P.2649V に関する一考察 ―法界仏像との関連性を中心に― 発表者 易丹韵 中国社会科学院
- 2023-06-27 「伊闕仏龕之碑」会誌 発表者 稲本泰生
- 2023-07-11 「伊闕仏龕之碑」会誌 発表者 稲本泰生
- 2023-07-25 研究報告：薬師如来供養儀式の図像研究―中古期の敦煌壁画関連図像を中心に 発表者 黄蓉 浙江大学
- 2023-10-10 賓陽南洞東壁造像記の再検討 発表者 大谷弦 大学院文学研究科
- 2023-10-24 賓陽南洞東壁造像記の再検討 発表者 大谷弦
- 2023-11-14 研究報告：敦煌莫高窟第 323 窟再考 発表者 濱田瑞美 横浜美術大学
- 2023-11-28 賓陽南洞東壁造像記の再検討 発表者 大谷弦
- 2023-12-12 研究報告：トックズ・サライ寺院・建築 B の仏教説話図について 発表者 篠原典生 中央大学
- 2024-01-23 研究報告：賓陽南洞における中小龕の開鑿順序及び供養者ネットワークの研究 発表者 李瀾 マクマスター大学
- 2024-02-13 研究報告：東大寺良弁僧正像の読み取りと観音化身説 発表者 川瀬由照 早稲田大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

稲本泰生、安岡孝一、フォルテ・エリカ、古勝隆一、倉本尚徳、呉孟晋、向井佑介、佐藤智水、打本和音、黄蓉、姜伊、李瀾

学内

富岡采花(文学研究科)、大谷弦(文学研究科)

学外

上枝いづみ(金沢大学・人間社会研究域)、内記理(愛知県立大学)、アヴァンツィ・カルロッタ(秋田県立大学)、山名伸生(京都精華大学)、大西磨希子(佛教大学)、濱田瑞美(横浜美術大)、篠原典生(中央大学)、高橋早紀子(愛知学院大学)、苫名悠(佛教大学)、高志緑(大阪大谷大学)、檜山智美(国際仏教学大学院大学)、石松日奈子(東京国立博物館)、齋藤龍一(大阪

市立美術館)、田林啓(大阪市立美術館)、王珏人(京都国立博物館)、北村一仁(河南農業大)、易丹韵(中国社会科学院)、黄盼(中国社会科学院)、呉虹(復旦大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数				延べ人数					
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
			(内女性)	(内女性)	(内女性)	(内女性)		(内女性)	(内女性)	(内女性)	(内女性)
人文研所属 (内女性)	1 (11)	17 (8)	8 (9)	9 (7)	7 (7)	154 (74)	51 (51)	64 (64)	49 (49)	42 (42)	
京大内 (人文研を除く) (内女性)	1 (1)	3 (0)	0 (1)	2 (1)	2 (1)	35 (14)	0 (0)	28 (14)	28 (14)	28 (14)	
国立大学 (内女性)	2 (2)	2 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
公立大学 (内女性)	3 (2)	3 (2)	2 (2)	3 (1)	1 (1)	13 (11)	11 (11)	13 (11)	11 (11)	11 (11)	
私立大学 (内女性)	6 (4)	6 (0)	0 (2)	2 (0)	0 (0)	46 (26)	0 (0)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	
大学共同利用機関法人 (内女性)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)	3 (2)	3 (1)	1 (1)	1 (0)	0 (0)	21 (19)	7 (7)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	
民間機関 (内女性)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
外国機関 (内女性)	2 (1)	2 (1)	1 (1)	1 (0)	0 (0)	17 (4)	4 (4)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	
その他 ※ (内女性)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
計	18 (23)	36 (12)	12 (16)	18 (9)	10 (9)	293 (155)	73 (73)	121 (105)	88 (74)	81 (67)	
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書
なし

12. 博士学位を取得した学生の数
なし

13. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

14. 次年度の研究実施計画

2024 年度も、これまでに培ったノウハウを用いて龍門の造像と造像記の研究を継続的に行い、信頼度の高い釈文の蓄積を中心として、学界の共有財産となる基礎資料をさらに拡充させていく。具体的には 2023 年度同様、初唐期の最重要窟の一つである賓陽南洞に大量に遺存する造像記を、造像の担い手である個人・集団の属性や構造を把握することに重点をおいて読解すると同時に、無記年・無銘分も含めた壁面全ての造像を網羅的に検討する作業を並行して進め、その複雑な造営経過の復元的理解に向けた共通認識を形成していく。また、各人の研究報告の機会をさらに充実させ、東アジアの宗教美術と社会の関係性の諸相について討論を重ねることで、龍門に重点をおきつつも、汎用性の高い問題の提起が行われる場として、研究会を有効に機能させる。

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

2024年度は、前身の研究班及び当班初年度の研究会ですでに検討が完了した龍門古陽洞及び蓮華洞の造像記について、研究所蔵拓の写真・釈文・解説を集成した資料集の出版に向けた編集作業を継続する。現地踏査による再確認が必要な事例の扱いが問題になるが、龍門石窟研究院とも連携して情報収集に努め、刊行までの時間の短縮に努める。2023年度からは賓陽南洞の造像記を検討し、学界の共有財産となる基礎資料のさらなる充実を図っているが、他洞については検討材料が十分でないものも多いため、その後は研究所の蔵する六朝期画像の拓本資料（龍門以外も含む）について、当所の過去の研究班における図像解読と再照合する作業を開始したいと考えている。また当班において非常に充実した研究発表が積み重ねられていることに鑑み、期間終了に併せ、これらに基づく論考を集成した書物を刊行することも視野に入れている。